

武者小路実篤における「神の国」

尹, 一
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/16014>

出版情報 : Comparatio. 5, pp.24-39, 2001-03-20. Society of Comparative Cultural Studies,
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



武者小路実篤における「神の国」

尹 一

I

有島武郎は「宣言一つ」（『改造』第4巻第1号 大正11年1月）のなかで、マルクス主義経済学者であった河上肇と対面した時の逸話を次のように紹介している。

氏は笑ひながら「或る人は私が炬燵に当たりながら物をいつてみると評するさうだが、全くそれに違ひない。あなたもストーブにあたりながら物をいつてる方だらう」

河上の質問に対して有島は「全く首肯」せざるを得なかったというが、「宣言一つ」の冒頭は「思想と實生活を融合した、そこから生ずる現象」を「人間生活の統一を最も純粋な形に持ち來たすものである」という言葉で始まっているように、「ブルジョワの白い手」をしながら労働問題を考えることへの決別の宣言である。実際、有島は「宣言一つ」発表の六ヶ月後、北海道狩太の有島農場開放の宣言へ踏み切ったのである。

ところで、農場開放への行動は突然の出来事ではなく、彼の作家生活のなかで未解決のままに抑圧されていた問題であったようである。同じく白樺派の同人であった武者小路実篤の「新しき村」運動に対する有島の反応は、運動の失敗を预言する批評と同時に未来の出来事である有島農場の開放を「約束」していた。

未来を御約束するのは無稽かも知れませんが、私もある機會の到來と共に、あなたの企てられた所を何等かの形に於て企てようと思つてゐます。而して存分に失敗しようと思つてゐます……

「武者小路兄へ」（『中央公論』第33年第7号 大正7年7月）

「あなたの企てられた所を何等かの形に於て企てようと思つてゐます。」というところは武者小路の「新しき村」運動と、その四年後の有島農場開放との連続性さえ感じられる発言であるが、そのなかでもより興味を引き起こす文章は、次の如く二人に限定させた「ハンディキャップ」に関するものである。

あなたも私も割合に安固な衣食住を保障されてゐる家に生れて來てゐます。それなのに、この人から羨まれるべき生活の中にも、私達は絶えず疾ましい思ひをして生活してゐなければならないのです。第一私達は都合のいゝ境遇に生ひ立つたといふ點から私達自身の才能をすら割引きして考へなければならないのです。公然とこれは自分が自分の力で造り上げた才能だぞと云ひ切る事が出来ないやうな立場にゐます。私達の持つてゐる品性でも、健康でも、愛心でも、こんな境遇にあればこそと省みねばならぬ弱さを持つてゐます。私達の本性が味はうとする幸福にさへこんなハンディキャップを置かねばならないのですから、物質的幸福に對して疾ましい思ひをし續けなければならないのは勿論の事です。私達はその存在をぎごちなく縛られてゐます。本統の自由はありません。

白樺派構成員の中心が「都合のいゝ境遇に生ひ立つたといふ」ことは周知の通りであつて、上の文章が武者小路に向けて發せられたことを考えれば、有島によって何回も繰り返される「私達」という代名詞を氣にする必要はないだろう。

ところが、「あなたも私も割合に安固な衣食住を保障されてゐる家に生れ」、その「點から私達自身の才能をすら割引きして考へなければならぬ」「ハンディキャップ」のことは、先ほどの引用文で有島が語った武者小路の「企て」、すなわち武者小路の「新しき村」運動を意識した「私達」ではないだろうか。武者小路の「新しき村」運動は当時の有島に、その四年後の農場開放という「未來の御約束」をもたらしていたのであろう。

ところで、「私達」の「ハンディキャップ」によって「公然とこれは自分が自分の力で造り上げた才能だぞと云ひ切る事が出来ないやうな立場にゐる」ということは、その二年前に白樺派の代表格である武者小路にあびせられた「自然主義前派」論争を連想させることである。

明治四十三年創刊された『白樺』の文壇での評価が「正当なる位置を認められる」ことになったのは大正六年前後になるという¹。文壇の一部で「バカラシ」²と輕蔑されていた彼等であったが、そのなかでも生田長江の「自然主義前派の跳梁」は白樺派に対する攻撃の激しさにおいて、代表的なものであったと言えるだろう。

便宜上かうした見方に従ふとき、雑誌「白樺」を本店とし、白樺臭い大小いくつかのより新しい雑誌をその支店とし、オメデタキ人武者小路實篤氏を総支配人とするところの白樺派は、近來の文壇及び思想界にかなり景氣よく賣り出して來てゐる。

（『新小説』第21年第11号 大正5年11月）

武者小路氏より少々ばかり餘計に己惚一自信と云つてもいい一をもつてゐる僕達に於ては、武者小路氏といふ固有名詞を、これほどしつこく反復するのは、決して愉快なことではない。けれども、僕達の種族と氏等の種族との種族闘争が問題なのだから仕方がない。

（『文藝雑誌』第1巻第5号 大正5年11月）

当時、「文壇の梁山伯」と言われているほどの文壇人として活躍していた生田は同年同月、それぞれ違う二つの雑誌を用いて武者小路を攻撃した。ここで、論争の論点であった「自然主義前派」についての問題は別にして、生田がいう「僕達の種族と氏等の種族との種族闘争が問題なのだから仕方がない」という言葉は、先ほど有島によって引用された「私達」の「都合のいゝ境遇に生ひ立つた」という「ハンディキャップ」（「武者小路兄へ」と無関係ではあるまい。

この攻撃に対する武者小路の応戦は同月の五、六、七日の『時事新報』紙上を通して、「生田長江氏に戦を宣せられて一寸」とする題で速やかに行なわれた。

生田長江氏は今月の「新小説」と「文藝雑誌」とで僕に向つて犬殺的棍棒をふり廻すことになった理由を説明してゐる。……生田長江氏を尊敬して僕を尊敬する人はあり得ないやうに、僕を期待する人で生田長江氏にまだ期待をもつ人はあるまい。しかしそれは長江氏が悪人だからではなく、長江氏の頭が零だ、少くも零にちかいと思ふから、僕は長江氏を輕蔑するのである。

（11月5日付）

僕は 外さんと夏目さんの評を書いてゐるのを見た時から、氏の頭の大ざつぱと單純と自分の刀で料理のしにくいものはどんどん平氣でしてゐる人だと思つた。

（11月6日付）

「種族」の問題に刺激された武者小路の生田に対する返答は、「氏の頭が零だ」と人身攻撃にまでおよぶことになる。当時、生田による「嫉妬喧嘩」³であると弁護する向きもあったにせよ、武者小路を攻撃する方は「どうもあゝ云ふ貴族社會の人はゆつくり過ぎて居る。思索をするにも思ひきつて呑気に思索する。」⁴と、「オメデタキ人」（生田長江）としての出身背景を問題にする論調がより多かった

ようである。論争の経過やその勝敗に関する事はともかく、武者小路の出身背景は彼の一つの弱みになっていたことは確かであろう。

ところで、上のような武者小路における「ハンディキャップ」は明治四十三年の『白樺』創刊以前にもみられるものであって、かなり早い段階から彼のなかで意識された問題点として存在していた。

明治四十年一月三日に「尊敬」していた徳富蘆花を初めて訪問しており、その後も徳富への訪問はしばらく続いたが、彼の自伝的小説として知られている「或る男」⁵のなかで、その時の様子が次のように描かれている。

其処に彼の「荒野」が出た。それを蘆花生は若々しい青葉のやうな感じがするお坊ちゃんの作であつて、「荒野」の感じはしないと云つた。その坊ちゃんあつかひが彼をよろこばさなかつた。その後少しこ達はつた気持で出かけた時、彼は蘆花生から「自分達のやうに食ふことに困つたことのないものには文学の仕事は出来ない」と云ふやうな話をきかされた。当時さう云ふ考をもつ人は少なくなかつた。そして彼は其処に引け目を感じてゐた、所が今蘆花生から、その意見をもつとも簡単に、決定的に聞かされた。さう思つた彼は、その帰途もう蘆花生はたづないでよさうと思つた。それならゲーテやトルストイやマーテルリンクはどうなのだ。馬鹿馬鹿しい。頭の単純な奴だと思つた。彼は帰途憤慨した。もし餓ゑなければ人間が駄目になるなら、悲惨な境遇にすべての人をおとす社会が一番いゝ社会になる。単純頭！彼はさう致命傷を自分に与へやうとするものに腹を立てた。その後、彼は蘆花生とは絶交することに一人できめた。

武者小路の処女創作集『荒野』を警醒社書店から自費出版したのが明治四十一年四月であつたので、徳富への訪問は一年以上にわたって続いていたということになる。

徳富がトルストイを明治三十九年六月に訪問し⁶、「労働主義によって神の国の世界、靈的な原理を現世（現実社会）に実現することを基本条件としている」⁷トルストイのキリスト教論の影響を受けていたことは周知の通りである。

そしてトルストイ主義の実践として、帰国直後の明治四十年二月から東京北多摩郡千歳村にて半農の田園生活を始めたのである⁸。が、徳富自らが「美的百姓」⁹であると告白したようにトルストイの「労働主義」の実践とは少し距離があつたようである。

「或る男」によれば、武者小路の徳富への接近は、トルストイの訪問が彼に「大なる興味」を起こしたことによるものであつたという。

しかし、徳富への尊敬は年齢上の先輩としてのものであって、「思想的には同格のやうに思つて」おり、「蘆花生と話して大いに得る処があるとは思はなかつた」という。また、徳富のところを「屢々訪ねた」理由は彼の半農生活を「美しく思つた」ことにあつて、トルストイを「同じく先生」にしていたためであつたのである。

ところが、上の引用文で見られる如く、徳富の『自分達のやうに食ふことに困つたことのないものには文学の仕事は出来ない』と云ふやうな話」は彼を怒らせ、尊敬していた先輩を「頭の単純な奴」として罵倒させることになった。

つまり、「種族」の差異を口にした生田の攻撃と徳富の話は、彼にとって「致命傷」（「或る男」）であつて、先ほどの引用文のなかで有島が語った「ハンディキャップ」と同じものが早くから、自分の「致命傷」として潜んでいたということになるだろう。

有島の死は農場開放に続く、「ハンディキャップ」を乗り越えようとする試みを不可能にし、「思想と實生活を融合」しようとした彼の試みは未完のままに終わっている。それに対し、武者小路は「新しき村」創設を通して、次のような実践運動を展開することになったのである。

II

「新しき村」創設は大正七年十一月十四日、宮崎県児湯郡木城村大字石河内字城の私有地における売買内約の成立によって実現し、この日が創立記念日として定められている¹⁰。が、「新しき村」の提唱はそれに先立った大正七年三月からの「新しき村に就ての対話」のなかに見られる¹¹。その後、武者小路の「新しき村」に関する活動は一層活発になっており、単行本『新しき村の生活』（新潮社、大正7年8月）の「序」では村生活の意義について次のように語っていた。

自分達は先づ自己の生活を改造する。新しき世界に最も調和しやすい生活をこの世で生活して見せる、かくて個人の生活を改造する。……自分達に打ち勝ちたいものは、自分達よりも、より正しく人間らしく自己を生かして見せてくれ。その時自分はその人の前によるこんで跪かなかつたらそれは自分の卑しさを示す。

村創設の提唱のなかには自分の「致命傷」（「或る男」）や有島が語った「ハンディキャップ」（「武者小路兄へ」）に対する克服という言葉は見られないが、「自己の生活を改造」することを優先するというところにそうした主旨が感じられる。

しかし、武者小路における最大の命題が「自己を生かす」ということにあった為、「新しき村」創設における背景を一つに断定することは禁物である。同時代の渡辺清が『新しき村』は武者小路氏の思想的帰結である。……今日の社会的欠陥から人間を救ふために建設された団体である。¹²と批評しているが、それは「自己を生かす」という個人に関する問題に徹底していた武者小路の本意を把握できず、「新しき村」運動を一つの社会救済運動としてとらえているものである。武者小路が主導した「新しき村」創設に、社会救済運動の以前の問題として武者小路自身を始めとする「自己」の問題が強く作用していることを見逃してはいけない。

さて、武者小路は「新しき村」創設の準備の最中、次のような武者小路本人だと思われる「僕」という人物を通して、「新しい世界」建設に対する意欲を描いている。

「新らしい世界を」

「君は本当に新らしい世界を建てやうと思つてゐるのかい」

「思つてゐる」

「建てられるかい」

「建てられるね。僕がもう少し本気になればね」

「まだ本気が足りないのかい」

「恥かしいが、まだ少し足りない。しかし今に人類が僕を召し出せばそれ迄だ。僕はいろいろの人と一緒に、人類の要求に応じて新らしい世界の設計図をかくて出さうと今かくてゐる。僕のは一番粗末に見えるが、自信は中々ある。人類は他の人ではまだ満足し切れることは出来ないらしい。僕のを見たら、我が意を得ていると云ふだらうと思ふ。さうなければもう万事きめられたのだ。

いくら僕でもぐずぐずはしてはゐられない」

「いつその設計が出来るのだ」

「もうぢきだ。もう二三ヶ月で出来上がる」

「六号雑記」1（『白樺』第9巻第5号 大正7年5月）

ここで注目すべき問題は、現在「僕」が準備していることが「新しい世界」の建設でなく、「新しい世界」を建設するための「設計図」であるということである。すなわち、「新しき村」創設は「新しい世界」建設の「設計図」と言えるものであって、「新しき村」創設はあくまでも「新しい世界」建設の前段階のものとしてみてもよいものであろう。

結局のところ、「新しき村」創設における意義を正確にとらえるためには、武者小路の「新しい世界」に対する期待がどのようなものであったかを把握することが不可欠である。

自分の内には二つの意志がある。実行の方面と、創作の方面と、自分には両方が助けあい、一つになることを信じてゐる。危険をまるで感じなくはないが、自分は内心の要求に従ふよりは仕方がない、自分をつくつたものゝ意志に従ふより仕方がない。自分は矢張り二十歳前後の時、なりたく思つてゐたものに近づく。

「編集室にて」31（『白樺』第9巻第7号 大正7年7月）

上の引用文で、武者小路が自分における「実行の方面と、創作の方面」の「両方が助け」あうことを望んでいる点は、その後の有島が「思想と實生活」の「融合」（「宣言一つ」）について語ったことを想起させる。文学者が持つ「思想」とそれに基づいた「實生活」を調和させたいという望みは、二つの調和を試みる人において内向的な形として、また外向的な形としてあらわれてくるものであろう。わけても二人の場合、白樺派という共通するものを持ちながら出身背景による「ハンディキャップ」（「武者小路兄へ」）を克服する問題として、実践活動を通して世の改良を試みるという外向的な志向を示しているのが特徴的である。

上の引用文では武者小路が文学者を志した学生時代の「二十歳前後の時」から、「創作」と「実行」との調和を試みていたことが語られており、それがすでに創作活動初期から彼が育んでいた問題であったことが明らかである。

二十二歳になる明治四十年六月、武者小路は「人間の価値」という題目で、当時の学習院の院長であった乃木希典の前で行なつた講演のなかで、次のように「神の国」の建設を打ち出した。

人間として産れたる吾人は人間の価値を発揮して、神の国をこの世に建設したいものではありませんか。諸君よ、人間の価値を発揮する為に力を尽して下さい、さうして神の国をこの世に建設したいものではありませんか。諸君よ、人間の価値を発揮する為に力を尽して下さい、さうして一日も早く悲惨なる同胞、無意味に呼吸せる同胞を助け、同時に吾人も無意味な生活を捨て、有意義の新生涯に入らうではありませんか。そこには人為的惨事は一もなく、衛生もゆきとゞけば伝染病も流行しないでせう。最後に一日も早くかゝる神の国の地上に建設せられんことを祈り、かくまで吾人人類のよく作られてゐることを感謝します。

武者小路が言った「神の国」を乃木がどのように受け止めていたかは知られていないが、そこで語られていた「神の国」がキリスト教的な影響から出てきた用語であることは言うまでもない。それについては後述するつもりであるが、早くから示された「神の国をこの世に建設したい」という彼の望みは、先ほど触れた「新しい世界」建設とその「設計図」である「新しき村」の創設と関連するものであろう。それは次の引用文、明治四十一年の五月十九日の日記にある「理想国の小さいモデル」ともかわるものである。

自分は此頃になつて何か仕事が出来る様に思へて来た。その仕事は大きい仕事ではないかもしれないが、しかし有益な仕事だ。さうして自分でなければ出来ない仕事だ。それは新しき社会をつくる事だ。理想国の小さいモデルを作る事だ。

つまり、武者小路が「実行」していた「新しき村」運動は、「新しき社会」すなわち、「理想国の小さいモデル」であつて、その「理想国」は先ほど乃木の前で述べていた「神の国」であつたと言えるのではないだろうか。

人類全体が新しき村の生活を始めるまで、自分達も新しき村の生活をするのはすまない。又始まらない。……現代に何千万の基督教信者がゐて、しかも世界が平和にならず、国と国の戦ひ、階級の争ひのなくならないのは彼等が、真に信仰を生かす本気さが無いことを示してゐる。我等は新しき村の精神を信じると共に、その精神をこの世に実現する機会を求め、この世に新しき村を本当に生み出すやうに欲しなければならない。……自分は自分の許す限り、真の新しき村を地上に建設するやう努力する。それを他にして自分は正しく生きられる処があるとは思へないものである。

「新しき村に就て」(『新しき村』第3巻第11号 大正9年11月)

「新しき村」の運動を「人類全体」化しようとするところから、すでに彼の仕事が理想を志向するものであったことがうかがわれるが、「理想国」(明治41年5月19日付の日記)を目ざす名としてもやはり「神の国」が相応しいことであつたと言えるかもしれない。そして、キリスト教における「神の国」を念頭にした発言であろうが、「何千万の基督教信者」に欠けている「信仰を生かす本気さ」を「村の精神」を通して「地上に建設する」という考えは、乃木の前で語った「神の国をこの世に建設したい」抱負と変わるものではない。

一方、上の引用文で「この世に実現する機会を求め」る「新しき村の精神」は、実際に次のような「村の精神及会則」(『新しき村』第4巻第1号 大正10年1月)として成文化されるが、そのなかから「村の精神」を引用してみることにする。

村の精神を簡単にかくと

- 一、世界の人間が天命を全ふし、各個人の内にすむ自我を完全に生長させることを理想とする。
- 一、その為に、自己を生かす為に他人の自我を害してはいけない。
- 一、その為に自己を正しく生かすやうにする。自分の快樂、幸福、自由の為に、他人の天命と正しき要求を害してはいけない。
- 一、全世界の人間が我等と同一の精神をもち、同一の生活方法をとることで、全世界の人間が同じく義務を果せ、自由を楽しみ、正しく生きられ、天命(個性もふくむ)を全ふすることが出来る道を歩くやうに心かける。
- 一、かくの如き生活をしようとするもの、かくの如き生活の可能を信じ、それを全世界の人が実行することを祈るもの、又は切に望むもの、それは新しき村の会員である。我等の兄弟姉妹である。
- 一、されば我等は国と国との争ひ、階級と階級との争ひをせずに、正しき生活にすべての人が入ることによつて、入らうとすることによつて、それ等の人が本当に協力することによつて、我等の欲する世界が来ることを信じ、又その為に骨折るものである。

「村の精神」が「各個人の内にすむ自我を完全に生長させることを理想とする」と言うように、「新しき村」運動は「自己を生かす」という個人的問題に徹底しようとしており、運動は社会救済の性格を帯びる政治的社会運動とはほど遠い非政治的なものであつた。

そして、「全世界の人間が我等と同一の精神をもち、同一の生活方法をとること」は「人類全体が新しき村の生活を始めるまで、自分達も新しき村の生活をするのはすまない」(「新しき村に就て」)という武者小路の決意が、運動には反映されている。

つまり、「真の新しき村を地上に建設する」(「新しき村に就て」)ことによって「理想国」(前出の日記)、言い換えれば、彼が思いつづけていた「神の国」の到来になるということであろう。「新しき村」を通しての「神の国」を実現するために武者小路の努力は変わることなく、次のような「我等は」という詩からも、その固い決意を読み取ることができる。

我等は 神の国を建設するための 労働者、 雇はれたもの、 撰ばれたもの、 托されたもの、 さうだ 我等は 神の国を建設するために 自ら進んで雇はれた 労働者である。

○多くの兄弟姉妹よ 我等の仕事を助けて 地上に 人間らしい世界をうみ出せよ、 そは美しいことである。

○今の人類が産出し得る 最上の国を 我等は建設しつゝあり、 この仕事を助けよ。

○万人の力よ加はれよ この仕事に、 神の国を生み出すこと、 その仕事を助け得ることを、 光栄とせよ。

○自分を生かすことは 兄弟姉妹を生かすこと、 兄弟姉妹の 協力が微妙に生きる国 そして人類の意志と 神の意志をかしこんで 個人としても 兄弟姉妹としても 立派に生き、 愛と正義が 自由に生きる国 独立と協力の国 自他共に生きる国 神と人の生きる国 真心と自由の生きる国 正しき要求すべてが生きる国 その国を求めよ、 その国は生れつゝあり、 その為に働け それは神と人類に 愛される！ (二一、 九、 二十三)

「新しき村を生み出すには」(『新しき村』第4巻第10号 大正10年10月)

「神の国」の建設を「新しき村」運動の目標にしたことは言うまでもないことであるが、 前にも触れたように「神の国」は「自己を生かす」という各人の個性が最大に尊重される場所である。 学習院での講演を通して、「神の国」建設が「人間の価値を発揮」できる唯一の場所であると主張して以来、「新しき村」創設後も変わらず、 彼はその意味を語りつづけていたのである。

大津山国夫は、 いわゆる武者小路の「三部作」¹³によって、「武者小路が『神の国』というとき、 それはいわゆる天国ではなく、 現世に創造される、 真、 善、 美の友愛社会のことであった。」¹⁴と定義づけている。 氏が武者小路の「神の国」を「いわゆる天国ではなく」「友愛社会」と語るとは、 キリスト教のなかで絶対者の力によって永遠の命が人間に実現するという、 そうした宗教性とは違う現世的「友愛社会」を意味するものであろう。

確かに「村の精神」(「村の精神及会則」)のなかで、「個人としても 兄弟姉妹としても 立派に生き、 愛と正義が 自由に生きる」と謳われていることからみれば、 大津山が武者小路の「神の国」に「友愛社会」を見ることはもっとも的確な見方である。

ところで、 武者小路が求めていた「神の国」は一体どういう性格を帯びるものであろうか。 すなわち、「新しき村」という実体の共同生活を営む彼が「理想国」(前掲載の日記)として考えた「神の国」は、「新しき村」のように現世に作られる物質的人間共同体を意味するものであろうか。

単純に考えれば、「神」という宗教性を持つ言葉が使われている以上、「神の国」を人間の理想的「友愛社会」として認識することが、 正当かどうかは断言できず、 より詳しい検討が必要である。 特にキリスト教のなかで語られている「神の国」はイエス・キリストにおける福音伝道の中心であったため、 それとの対照も欠かせない問題であろう。 武者小路の作品のなかで「神の国」について描かれたものを中心にし、 上のような問題を考えてみたい。

III

まず、 次のような武者小路の「神の国」¹⁵と題する文章を引用してみる。

神の国とはいかなる国であろうか。 其処では自分の家にある神の如き愛がすなほに生きる国である。 ……神の国は心霊上のものである。 しかし幽霊の国であつてはならない。 神の国は地上のものであり得る。 しかしそれは神の国の住民たる資格の出来たものゝ上に築かれる。 神の国とその義しきを求めるものゝうちに先づ神の国はあらはれる。 神の国は人間が住める世界でなければな

らない。但し人間の内にある不正な隣人への愛に背く欲望は生きてはならない。

あたかも「新約聖書」の山上の垂訓を思わせる文章であるが、「神の国は心靈上のものであ」って、「幽霊の国であつてはならない、神の国は地上のものであり得る」ということは、政治的、物質的に存在する「神の国」を意味するものではなく、精神的世界として現世に出現できる「神の国」を求めるものである。

大正十年四月発行の『生長する星の群』（第1巻第1号）に発表された「ユダの弁解」は、現世における政治的「神の国」を求めているイスカリオテのユダが、次第に「神の国」を来世のものとして説いていくキリスト教のイエスに対する反感から彼を売ったという自分の「弁解」を、一人称で語る作品である。従来においては武者小路の作品論では注目されることもなかった小品であるが、武者小路の「神の国」に対する考えがよく現われたものとして看過できないところがある。

自分は耶蘇を嘘つきだとまでは云ひたくないが、神の国にたいする約束を段々あいまいにして、しまひには神の国はこの世では得られないもので、死んだ後に得られるものだと云ふ事を香はせて、ごまかす処などは、馬鹿正直だとは思へない。馬鹿正直処か、耶蘇は非常なずるさを持つてゐた。……自分が耶蘇を尊敬するのは、神の国をこの世にうちたてる力を持つてゐると思つたからだ。処が事実それは不可能であると云ふことがわかつた。

四福音書にみられるイエスの「神の国」は生前に得られず、「死んだ後に得られるもの」であるというユダのイエスへの批判であつて、イエスへの裏切りは彼が「神の国をこの世にうちたてる力」がなかったことに気付いたことによる。

武者小路は常に「地上の上」に出現できる「神の国」を語っていたから、ユダのイエス批判を作者は肯定しているかのように見える。が、ユダのイエス批判のなかで武者小路が肯定するものは「神の国」に対するユダの批判のみで終わって、それ以外のユダによる「弁解」は作者と対立するものである。たとえば、「耶蘇は、自己本位の男である。自分を愛し、自分を尊敬し、自分を喜ばし、自分を信仰するものだけを愛した」というイエス批判は、むしろ「新しき村」における「村の精神」のなかで「各個人の内にすむ自我を完全に生長させることを理想とする」という自己中心の問題に近い。

「ユダの弁解」が掲載された『生長する星の群』の次号（第1巻第2号 大正10年5月）には「ヨハネ、ユダの弁解を聞いて」という題で、前作の半分程度の量が後編のような形で載せられた。

今度は、あまりに政治的な「神の国」を待っていたユダの誤解を弟子ヨハネの口を借りて、前作に対する反撃の形として語ったものである。たとえば、冒頭で「ユダの求める神の国は愛の国ではありません。其処は平和と公平の国でせう。」と語ることは、四福音書におけるイエスの「神の国」が政治的なものではなかったことを示すものである。「ユダの弁解」によって「神の国」が政治的なものとして見られる誤解を完全に防ぐ意図があつたのであろうか、イエスの「神の国」が社会主義的な「平和と公平の国」とは違ったものであることに冒頭から言及する。

ところで、武者小路においてキリスト教的素材が著しく現われている作品の殆どは彼が「新しき村」に移住した後のものである¹⁶。そのなかでも、先ほどの二編の作品と「耶蘇」¹⁷は、キリスト教のイエスにおける「神の国」に触れるところが他の作と比べて特に多い。「耶蘇」においてもキリスト教におけるイエスの「神の国」が来世的になっていったことが、ユダの誤解を生んだと指摘される。

ともかくイカリオテのユダは別としても、耶蘇の神の国にたいする考が、段々現世的ではなく、精神的になり、しまひにはあの世的にさへなつたことを不満足に、不安心に思つたものはないとは云へないであらう。

(二十九)

「耶蘇」のなかでのユダの「神の国」に対する批判は翌年の「ユダの弁解」にもつながっている。こうして、キリスト教におけるイエスの「神の国」と自分が説く「神の国」の差異が「この世に求めて得ず、個人の心に求めて」得ることと、「地上の上に建設」するところにある、ということを作者は語ろうとしたのであろう。

耶蘇は、神の国を最も求めた最大の人である。神の国とその義しきを求めることが、人間にとって最も必要なことである。耶蘇はそれをこの世に求めて得ず、個人の心に求めて之を得た。
(終りに)

「新しき村」運動を「神の国」の「モデル」(前出の日記)として考え、その「村の精神」によって「個人の心」のみならず「神の国」を「地上の上に建設」できるという自信を持っていた彼にとってみれば、「神の国」建設に限ってはキリスト教のイエスを見下ろす姿勢があったのであろうか。無論、武者小路のイエスは、キリスト教の「神の子」としてのイエスではなく、人間のイエスである。したがって「耶蘇」は、次のように人間イエスと対等な意識を持つ「自分」を語ることで作品を終わらせている。

耶蘇よりも自分は労働を讃美するものである。人間の義務を自己の個性を真理の御霊を生かしながら果すことが出来る時が来たと。我等は病人ではなく、健全な人間として益々耶蘇を讃美することが出来る時が来たと。耶蘇よ。君を仰ぎ見ることで我等はどの位力を得るであらう。君のことを思ひ出す度に有難くなる。君の心の光りが我等を今更に照らしてゐる。それをまともに受ける時、自分は涙ぐむ。君の真心は今や全世界に満ちてゐる。この小さき弟を憐め、君のつるに自分を結びつけずに、神へすぐ根をはらうとする我等の運動を厚意をもて見てゐてくれ。私はまだ君の友としては話せない小さいものだ。いつかは君と心置きなく話せる人間になりたい。……最も大なる兄弟よ、我を助けよ。
(終りに)

早くから自分の「致命傷」(「或る男」)を「自覚」していた武者小路にとって、「実行の方面」(『編集室にて 31』)と創作活動の調和は「新しき村」創設によって実現できるものであったのであろう。

つまり、「耶蘇よりも自分は労働を讃美するものである」というのは「新しき村」で行なった「労働」を指す。そして、「いつかは君と心置きなく話せる人間になりたい」という期待について言えば、前で言及したように彼は人間イエスとの対等意識を持っていたのであり、「いつか」という時期は明らかに、現在進行中の「真の新しき村が地上に建設」(「新しき村に就て」)される時を指す。

「耶蘇」、「ユダの弁解」、「ヨハネ、ユダの弁解を聞いて」の三つの作の執筆された時期が「新しき村」運動の最中であったことを考えれば、著作の動機に人間イエスの「神の国」より、自分の「神の国」が「地上の上に」実現できるという自信があったと言えるのではないだろうか。

ところで、上でみられるような、「神の国」建設について人間イエスと対等的立場に自分を置こうとする意識は「新しき村」運動以前にもあったものである。

自分の理想的なことを云ふならば、自分は宗教家になりたく思つてゐる。しかし自分は生命を愛する宗教家であつて、後世を恐れない宗教家でありたい。……それで理想を云へば自分が信じ切れる「神の国のたてかた」を知りそれを実行する為に全力をつくせる人間になりたいのである。

「神の国のたてかた」を真に知つたものが宗教家として一番高き人間であることは云ふまでもないことである。(七、十七) なほ云ひたいことがあるが恐ろしいから今はやめる。

「理想的なこと」<初出総題「雑感」> (『白樺』第6巻第8号 大正4年8月)

『神の国のたてかた』を真に知つたものが宗教家として一番高き人間である」ということは早くから「神の国」を力説してきた自らを自称するものであろう。自伝的小説「或る男」のなかで、「彼は私かに自分をもつて人類が日本に期待してゐる天才の一人でありはしないかを、ほのめかしてゐる」という自意識は、まさしく『神の国のたてかた』を真に知つたものは「自分しかない」という救世主としての自覚である。

「なすべきことはなす 自分のことは自分に任せてくれ」それが彼等の見出した道であり、又人類が真に自覚して見出した道であることを彼は信じる。犠牲者を要しない社会、誰とも兄弟姉妹である社会。それが彼の求める社会であるから、彼は自分達の村が生長すればする程、同志でない人々にもよろこばれることを信じてゐる。

上の引用文でみられるのは「新しき村」の創設者として、「同志」を「神の国」へ導いていく為に「人類」から選ばれたという「自覚」である。すなわち、「耶蘇」のなかで人間イエスに感じていた対等意識は、自分をキリスト教におけるイエスのような「宗教家」に押し立てて、「神の国」建設の為に人類から選ばれたとする救世主意識によるものであったと言えよう。

IV

武者小路は、「或る男」で「夏目さん、藤村、独歩を愛したと同時に、一方、内村さん、蘆花生、木下尚江などを尊敬した」という。

もし「創作の方面」において夏目漱石、島崎藤村、国木田独歩などの影響を受けたとすれば、内村鑑三、徳富蘆花、木下尚江などからは「実行の方面」（『編集室にて』31）においてなんらかの感化があったのであろうか。そのなかでも内村が同じく『白樺』派の有島武郎、志賀直哉が直接の関係を保っていたことに比べ、彼との関係は比較的薄くみえる。しかし武者小路が、「内村さんは日本人にまれにみるいゝ素質をもつてゐる人と思」つたり¹⁸、「内村さんの文章とか、『聖書の研究』という雑誌は毎号取って愛読していた」¹⁹ことは、内村がトルストイ以外の第二人物として彼にキリスト教的影響を与えていたことを示すものではないだろうか²⁰。

天国は今之を身の外に求むる能はず、然れども之を心の衷に建つるを得べし、キリストの愛を以て自由に人の罪を赦して、我は我が心より憎悪憤怒の苦きを去り、立ろに其処に平和の天国を建つるを得るなり、天国は無限の宥恕の行はるゝ所なり、キリストの愛を以てして罪の世に在る今日と雖も我等は容易に我等の衷に天国を建設し得るなり。

「天国の建設」＜『聖書之研究』第79号「所感」 （明治39年9月15日）＞

「キリストの愛」を持って「心の衷に建つるを得べし」「天国」であると述べた内村に対して、武者小路の「神の国」は「神の国とその義しきを求めるものゝうちに先づ神の国はあらはれる。」と語った後、次のように続ける。

一心に神の国を求めよ、その義しさを求めよ。その喜びを求めよ。自己の内にある隣人の愛と、人類的爱と、神の愛を生かせよ。そしてなすべきことをせよ。自己を生かせ。すべての人がパンとそれ以上のものを得られるやう、祈れ、求めよ、骨折れよ。そしてその力が一つになる時、其処にさき出づる花。それは神の国である。神の国を求めよ。すべては与へられる。

「神の国」（『生長する星の群』第1巻第1号 大正10年3月）

あたかも内村の「天国」との差異を感じないほど、彼が述べる「愛」と「神の国」の建設が似ているように見えるが、決定的な差異は「自己を生かせ」という問題にある。

上の引用文で語る内村の「天国」建設が、「キリストの愛を以て自由に人の罪を赦す」という自己否定によるものであれば、武者小路が言う条件は「自己の内にある」「愛」を生かす自己肯定にあるだろう。また、キリスト教におけるイエス・キリストが荒野での悪魔の誘惑²¹のなかで「人はパンだけで生きるものではない」と物質を象徴する「パン」を否定したと違って、「すべての人がパンとそれ以上のものを得られる」ことを望むことは、「新しき村」という実践運動を展開していた人として、現世重視の姿勢が窺われるところである。

ところで、内村が「天国」建設の絶対的条件にする「キリストの愛」に対し、武者小路の「自己の内にある隣人の愛と、人類的愛と、神の愛」は何を意味するものであろうか。

まず、武者小路が言う「神」は無論、キリスト教で言う創造主、絶対者と違って、「我等の願ひの内にゐる。かうありたいと云ふもの」²²であり、「神」さえも「自己」によって生成されるものとして認識される。そして早くから武者小路は、次のように「人類」を「神」の一つとして数えていた²³。

人類は何者にも犠牲をはらうとことを要せず。人類はすべての主なり。主とならざるべからず。万一、人にして神の奴隷ならんか、吾人は神を人類の奴隷となさざるべからず。人類よ、人類よ、吾が神は汝なり。

武者小路における「人類」は特に重要な概念であって、「人類」を「吾が神は汝なり」と語っている如く、「人類」はキリスト教の神に代わる絶対的なものであった。言い換えれば、武者小路が言う「神の国」は＜人類の国＞とも呼べるものであろう。そして、「人類の意志」は次の引用にみられるように「神の国」建設を担う一つの理念としてあらわれる。

人類の意志と云ふのは、何度も云ふが、人類の完全に向つて生長せんとする意志だ。そして人類が完全に生長した暁はどうなるかの。その時は、すべての人の生命が完成され、……すべての人の生命はお互に大調和して、少しも殺しあはず、犠牲者は勿論、少しの圧迫もうけず、万民、自由をたのしみ、健全な生活をたのしみ、お互は愛しあひ、言葉の必要もなく、無心の状態で満足し、心は自づと楽しく、無比の友情が全人類を支配しつくすのだ。今の我等にそんな世界は想像出来ず、想像した処がまばゆすぎて其処に住みたいとさへ思はないかと思ふが、しかしその世界の平和は極はまりなく、その楽しさも亦極はまりないものと思ふ。其処には一人の不幸なものもなく、病気の元因は根絶され、人々は天命を全うし、なすべきことをなし天命を果して大往生する。天災も人力を尽して予防されるから恐れる必要はないのだ。そんな世界は来ないと、云ふな、それが人類の理想で、人類は其処を目指して進みつゝあるのだ。天国や、極楽は過去のものでも、未来のものでもなく、我等の理想の内に存在するのだ。そして人類は地上にそれを建設したがつてゐるのだ。 「前編」(三十五)、『人類の意志に就て』(岩波書店、昭和10年7月)

上の引用文にある「世界」が、今までみていた「神の国」であることは言うまでもなく、「新しき村」における「村の精神」とも共通するものである。その「神の国」は「人類が完全に生長した」時に建設されるものであって、それに「向つて生長せんとする意志」が「人類の意志」というものである。

したがって「神の国」建設を理想とする「新しき村」運動は、上の引用に続く次のような「人類の意志に叶ふ」ことである。

しかし我等は人類の意志に叶ふ世界を出現させるために骨折ることは大事なことであり、又愉快なことである。我等が新しき村の仕事を始めたのもこの動機からである。日本では新しき村の仕

事の成功を望むものは多いが、この仕事のために力を加へようと思ふものは殆んどないと云ふ方が真に近い、だから今日でも新しき村はまだごく貧弱な姿のまゝで存在してゐるが、しかし我等はこの仕事の人類の意志に叶ふことを信じてゐるのだ。 「後編」(三)

前で触れたように、「人類」と「神」が同格のものであった為、「人類の意志に叶ふ」「新しき村」運動における武者小路は「人類」すなわち、「神」に選ばれたものであった。ここでも先ほど言及したような武者小路における救世主としての意識がみられるだろう。

ところで、「人類」について述べた文章のなかで、次のようなものがある²⁴。

人類は一個人を愛して、他の個人を愛しないと云ふことはない。だが人類の愛を、深く感じる事が出来る人と、出来ない人とある。日光は誰の上にも照つてゐるが、日光のありがた味を知る人と、知らない人とあるやうなものである。

「人類」がすべての「個人」を愛することは「人類の意志」によるものであろう。ただし、その「愛」を感じることは「個人」の問題である。そして、「神」と同格の「人類」の「意志」によって「新しき村」が創設され、「人類」の完全な「生長」によって「神の国」が到来するという武者小路の自説は、次のような内村の「神の義」との類似がみられるものであって、彼の「神の国」におけるキリスト教的要素を探る為に看過すべきものではない。

此の義は「凡ての人に向ひて」発せられし義である、即ち神は凡ての人類に向つてイエスの十字架の故を以て此信仰の義を発し給ふたのである、目的は凡ての人がキリストを信じて此義を我有とするにある、決して或一部の人を義するを目的として発せられし義ではない、故に此義は凡ての人に向ひて発せられしものである。……然り凡ての人に向つて発せられし義である、けれども「凡て信ずる者の上に止まる義」である、此義を我物とするは信ずる者に限るのである、……

『羅馬書の研究』「第十八講 神の義(二)」(大正 10 年 5 月 29 日)

キリスト者である内村の「神の義」が「キリストの十字架の贖罪に依拠する」(「第十七講 神の義 <一>」)ことで、また人類の上に神が臨在するところに武者小路との根本的な差異があることは無論のことである。しかし、武者小路が「日光」の例をもって語る「人類の意志」は、『「凡ての人に向ひて」発せられし義』としながら、「けれども『凡て信ずる者の上に止まる義』である」と言い、その構造において類似が窺われるだろう。さらに、「神の義は愛を含有する」(「第十八講 神の義(二)」)という内村の「神の義」論は、「人類」の「愛」を語る武者小路の「人類の意志」との差をあまり感じさせない。

内村の新約聖書研究の集大成と言える『羅馬書研究』は、大正 10 年 2 月 10 日から大正 11 年 11 月 10 日までの東京講演を『聖書之研究』(第 247 号—第 268 号)に連載したものである。そのなかに「羅馬書研究」の中核の一つであった「神の義」論が四つにわけて載せられているが、雑誌『聖書之研究』は武者小路自ら「毎号取って愛読していた」(注 19)と語っているように、彼が内村の「神の義」論を読んだ可能性は十分である。

そして明治期、内村の文章のなかで「神の国と其義」²⁵と題する次のような引用は、「神の国」と「神の義」をより詳しく説明するものである。

汝等先づ神の国と其義とを求めよ、然らば此等の物は皆な汝等に加へらるべし。馬太伝六章三十三節。神の国とは信者が神の名を以て自己の努力に由て地上に建設せんとする理想の社会を云ふのではない、神の国とはキリストの再臨に由て彼が万物を己れに服はせ得る能力を以て実現し給

ふ未来の聖国である。

「自己の努力に由て地上に建設せんとする理想の社会」は、同じく明治の後半、学習院で武者小路が語った「神の国」を思いおこさせる言葉であろう。

ところで、内村が「神の国」と「神の義」が「キリストの再臨」によって「実現」するという信仰は後日、日本キリスト教界に大きな波乱を起こした大正七年の「キリスト再臨」運動の基礎となるものである。

大正七年と言えば、武者小路の「新しき村」運動が提唱され、村の創設が行なわれた年でもあり、二人の関係はただ偶然と言えないほどの密接な時間的にかかわりを持っていたのである。

従来の研究では「新しき村」創設の外的要因として「一七年（大正六）のロシア革命と、一四（大正三）に勃発し、まだ継続中であった第一次世界大戦をあげなければならない」²⁶とされており、「キリスト再臨」運動の動機²⁷の一つとして広く知られている第一次世界大戦の触発と、その外的要因において類似する点がある。

武者小路の第一次世界大戦に際しての反戦の姿勢は「へんな原稿」（『改造』第1巻第4号 大正8年7月）などにみられるものであって、前で引用していた「村の精神」のなかでも「我等は国と国との争ひ、階級と階級との争ひをせず」という「新しき村」運動の反戦体制が明記されている。

つまり、二つの運動における動機のなかに、戦争によって崩されていく人間社会を新しい世界に変えてみようとする両者の思想が含まれていたと言えよう。ただし、武者小路には「神の国」建設へ導いて行くものとして自分が「人類」から選ばれたのだという救世主意識がみられた。

ところが、武者小路が人類自らの生長によって「神の国」の到来を見、人間の努力にその可能性を見出していることに對し、内村は人間の限界を感じて「神の子」イエス・キリストなしの「神の国」は地上に建設できないと述べた。

キリストの再臨とはキリスト御自身の再臨である。これは聖霊の臨在と称する事とは全然別の事である。またこれと同時に、死せる信者の復活があり、生ける信者の携挙があり（テサロニケ前書四・十七）、天国の事後的建設がおこなわる。すなわち再臨がありて天国が現わるるのであって、人類の自然的進化、または社会の改良、または政治家の運動によって神の国は地上に現わるるのではない。

「余がキリストの再臨について信ぜざる事ども」（『聖書之研究』第211号 大正7年2月10日）

内村にとって「神の国」を地上に建設することの前提は何よりも「キリストの再臨」であった。その後には起きることが「天国の事後的建設」であったが、「人類の自然的進化」が「神の国」を地上にもたらすことではないという指摘は、「人類の完全な生長」（「人類の意志に就て」）によって建設できるという武者小路の「神の国」を否定するものであろう。

大正七年の年頭から、ほぼ同時に始まった二人の新しい世界への提言は、第一次世界大戦という外的要因に先立って早くから内面の問題として育まれていたが、内村がその内面において「キリスト再臨」信仰を持っていたとすれば、武者小路においてはそれに対応する信仰的体系はなかったのである。

したがって明治末に語り始められた武者小路の「神の国」が大正期の「新しき村」という実践運動を通し、次第に絶対的存在である「人類」とその「意志」を用いて宗教的色彩を匂わせていったのは、信仰的体系の不在を補うための当然の過程であったかもしれない。

そして、前で触れてみたとおり、武者小路と生田等の間で起きた、いわゆる「自然主義前派の跳梁」論争も「新しき村」創設の動機における外的要因の一つとして忘れてはいけないことである。

「オメデタキ人」（「自然主義前派の跳梁」）武者小路は、「食ふことに困つたことのないものには文学の仕事は出来ない」（「或る男」）と徳富に罵られことを、彼自身の「致命傷」として思っていた。

その「致命傷」を、同じく白樺派の同人であった有島は「私達自身の才能をすら割引」（「武者小路兄へ」）くものである「ハンディキャップ」であったと語った。そして彼らの「致命傷」と「ハンディキャップ」の克服は「創作」と「実行」（武者小路、有島は「思想」と「実生活」）を調和する問題として現われ、それぞれ「新しき村」運動と農場開放という実践の行動へとつながったのである。

ところが、農場開放の宣言から一年後の有島の死で、「思想」と「実生活」における調和は連続性を見せないまま終わってしまい、それ以上の試みにはつながらなかった。

一方、武者小路の「新しき村」運動は彼自らが村に移住し、満七年間にわたって「自己の生活を改造する」（「新しき村の生活」）ことを行うものであり、その試みは有島より明確なものとして結実したと言えよう。彼はその後も村外会員として「新しき村」に対する情熱を示しつつける。

ところで、彼が目標にしていた「新しき村」運動は「神の国」という「理想国の小さいモデル」（明治41年の5月19日付の日記）として、早くから彼自身の内面に存在していた問題であった。特に大正期の「新しき村」運動が最終的に目ざしていたものは「神の国」を地上に建設することであったが、それは物質的、政治的に形成され、目に見える形としての「国」ではなく、現世に出現できる精神の世界であった。

また、彼は村創設以前から『「神の国のたてかた」』を知りそれを実行する「宗教家」（「理想的なこと」）になることを願っていたという。「新しき村」の創設者として、「人類」から選ばれたものとして、彼が持っていた「自覚」は、「人類」を「神の国」へ導いていくという救世主意識であったのである。

すなわち、武者小路の「神の国」には社会改良運動、また「創作」と「実行」を調和しようとする思想とは別に、「神」と同格の「人類」という絶対の概念のなかに宗教性が感じられることは否定できない。

そして、「神の国」という新しい世界の建設に向かっていた彼にとって、良い前例をみせていたのは四福音書にみられるイエスであった。自伝的小説の「耶蘇」のなかで、彼はイエスを「地上に神の国を本当にたてようとした最大の人だ」とみ、「神の国」を「この世に求めて得ず、個人の心に求めて得た」という。

しかし、それに対して「自分」は、「人間の義務を、自己の個性を、真理の御霊を、生かしながら果すことが出来る」という。すなわち、「自分」が建設していく「神の国」を「個人の心に求めて得」ることは無論のことであって、「新しき村」運動を通して「この世に求めて得」ることが出来る自信に満ちた発言であった。そして、作品の結末に至って目立つ「君」、「友」、「兄弟」という、人間イエスへの呼びかけはイエスへの対等意識を示すものであろう。

つまり、武者小路が「新しき村」運動の最中に人間イエスを通して見出したのは、「自分達」によって近いうちに建設できる「神の国」に対する確信であったと言えよう。前にみたような「新しき村」創設直後、次から次へと現われてきた、キリスト教から素材を得た彼の作品の著作動機も、そこに起因するものであったと思う。

「創作の方面」と「実行の方面」の「両方が助けあい、一つになることを信じてゐる」た一人の文学者が「二十歳前後の時、なりたく思つてゐたもの」（「編集室にて」31）は「理想国の小さいモデルを作る事」（前掲載日記）であった。結局、その「モデル」であった「新しき村」を「実行」することは出来たとしても、絶対者になり得ない人間が夢見ていた「理想国」の「神の国」は理想のまま、「創作」の世界に残して置かざるを得なかったということであろう。

※ 1. 本稿の引用における凡ての傍点は省略した。

2. 本稿の引用は次の底本による。

- ①.『近代文学評論大系』第4巻大正期1（角川書店、昭和46年12月）
- ②.『有島武郎全集』（筑摩書房、昭和56年）
- ③.『内村鑑三全集』（岩波書店、昭和56年）
- ④.『武者小路全集』（小学館、昭和62年）

¹ 赤木桁平は「現代の文壇と白樺派の運動」（『新潮』第27巻第3号 大正6年9月）のなかで、「『白樺』は、その正当なる位置を認められるためには、あまり多数の日子を要した。今日、武者小路氏でなければいけぬと云ひ、志賀氏、里見氏、若しくは有島氏でなければならぬといふ連中が、今から二三年前までは、果してどんなことを言つてゐたらう。」と、白樺派が文壇で評価され始めたのが最近のことであることを語っている。

² 武者小路自らが、『白樺』を軽蔑する「バカラシ」について次のように述べていた。「白樺を出したとき、新潮の六号で、アホダラ経まがひにバカラシといつてからかはれた。バカラシの反対がシラカバだ。しかし、そこに語呂合せが何にもならないことはわかつてゐる。ともかく軽蔑されてきたことはたしかだ。」（『雑感』『新潮』第24巻6号 大正5年6月）

³ 赤木桁平「所謂『自然主義前派』に就て一生田長江氏に與ふ一」（『新小説』第21年第12号 大正5年12月）

⁴ 加藤朝鳥「武者小路氏の位置」（『武者小路実篤論』『新潮』第25巻第4号 大正5年10月）

⁵ 初出は『改造』に大正10年7月（第3巻第7号）から、大正12年11月（第5巻第11号）まで19回にわたって連載された。

⁶『順礼紀行』（警醒社、明治39年12月）に詳しい。

⁷ 神田重幸「徳富蘆花『順礼紀行』論—特にキリスト教思想をめぐって—」（『関東短期大学紀要』23 昭和53年3月）

⁸ 田園生活の記録として執筆したのが『みみずのたはこと』（警醒社、大正2年3月）である。

⁹ 注8。

¹⁰『土地』、『或る男』に詳しい。また、『武者小路実篤全集 第四巻』（小学館、昭和63年6月）の「解説」（大津山国夫）にその経過が詳しく書かれている。

¹¹『武者小路実篤全集 第四巻』（小学館、昭和63年6月）の「解説」（大津山国夫）に「『新しき村に就ての対話』が、新しき村提唱の第一声になった」という。

¹²「武者小路実篤研究」＜初出は『新潮』（第34巻第4号 大正12年10月）、引用は『日本文学研究資料叢書 白樺派文学』（有精堂、昭和49年8月）による。＞

¹³ 武者小路は「自分の三部作について」（『生長する星の群』第2巻第11号 大正11年12月）という講演筆記のなかで、キリスト教から素材を得た『幸福者』、『耶蘇』、『第三の隠者の運命』を「自分の三部作」として位置付けている。

¹⁴注11。

¹⁵「神の国」＜（初出は『生長する星の群』第1巻第1号 大正10年4月）、『新しき村叢書 第四編 理想的社会』（曠野社、大正12年10月）所収＞

¹⁶ 寺澤浩樹「武者小路実篤の世界観とキリスト教」（『文教大学国文』22 平成5年3月）は、武者小路におけるキリスト教的要素を持つ作品を次のようにまとめている。そのまま引用する。

- | | |
|--------|-------------------|
| 大3・2 | 戯曲「二十八歳の耶蘇」 |
| 大8・6 | 小説「幸福者」 |
| 大8・12 | 小説「友情」 |
| 大9・6 | 小説「耶蘇」 |
| 大10・4 | 小説「ユダの弁解」 |
| 大10・5 | 小説「ヨハネ、ユダの弁解を聞いて」 |
| 大11・6 | 戯曲「神と男と女」 |
| 大11・9 | 戯曲「人間万歳」 |
| 大11・10 | 小説「第三の隠者の運命」 |

一見してわかるようにこの大部分は後期、すなわち武者小路が「新しき村」に移住した後の作品である。またこれらの作品は「友情」、「第三の隠者の運命」などを始めとして、どれも武者小路の代表的作品である。したがって「新しき村」の实践とキリスト教的な宗教性、及び作品の文芸的価値の高さとの間には深い関係があるのではないだろうか——と筆者は考えている。

¹⁷ 初出は『新しき村』に大正8年8月（第2巻第8号）から大正9年6月（第3巻第6号）にわたって連載された。その後、「新しき村出版部」によって大正9年9月、単行本として出版された。

¹⁸ 『人生を斯く考へる』（新潮社、大正14年7月）（初出は『不二』第1巻第6号 大正13年10月・11月、『中央公論』第40巻第1号・第2号 大正14年1月・2月）

¹⁹ 白井吉見との対談「『現代日本文学全集』月報64号、昭和32年3月」

²⁰ 「最初の最大の恩はトルストイです」（『トルストイ研究』第2巻1号 大正6年1月）と語っているように、武者小路の文学や思想にトルストイが与えたものは非常に大きい。例えば、「トルストイというフィルターを通して知ったキリスト教的世界」（注16の寺澤浩樹論）とまで言われるほど、彼におけるキリスト教的要素とトルストイとの関係は密接なものである。但し、武者小路が内村の『聖書之研究』を「毎号取って愛読していた」ことを考えれば、トルストイ以外にも、キリスト教的影響を与えた人物として内村をあげることができるだろう。

²¹ マタイによる福音書四章、ルカによる福音書四章にみられる。

²² 「瞑想」『人生を斯く考へる』（新潮社、大正14年7月）（『不二』第1巻第6号 大正13年10月・11月、『中央公論』第40巻第1号・第2号 大正14年1月・2月）

²³ 新体詩「人道の偉人」『荒野』（警醒社書店、明治41年4月）所収。

²⁴ 注18。

²⁵ 初出は『聖書之研究』第134号（明治44年9月10日）。

²⁶ 注11。

²⁷ 『近代日本と基督教一大正・昭和編一』（基督教学徒兄弟団、昭和31年11月）の中での久山康の発言などは、内村「キリスト再臨」信仰に火をつけ、大正七年の「キリスト再臨」運動を起こした外的要因として第一次世界大戦とアメリカ参戦などをあげている。また『内村鑑三信仰著作全集 13』（教文館、昭和37年12月）の「解説」（山本泰次郎）なども「キリスト再臨」運動の動機を第一次世界大戦と見ている。